

[成果情報名]「高距限界集落」の動向と地域活動参与調査結果に見る集落存続のための方策

[要約] 高距限界集落の殆どが現在でも活力を有しながら存続する。その事由は、地域の「村がら」を活かした自律的な住民活動による。そうした自律的な活動には、活動資源の「羅列」と「取り合わせ」により、住民自身の「段取り」を促すことが有効である。

[キーワード] 限界集落、住民活動、資源の羅列、取り合わせ、段取り

[担当] 農工研・農村総合研究部・都市農村交流研究チーム

[代表連絡先] 電話 029-838-7559

[区分] 農村工学

[分類] 研究・参考

[背景・ねらい]

高度経済成長下においてその存続が危ぶまれ、1974 年時点に「限界集落」とされていた長野県等の集落を追跡調査し、その動向と現状に至る要因を探り、その結果と他の中山間地域事例での調査経験を基に、集落存続のための方策を提示しようとするものである。

[成果の内容・特徴]

1. 山口（1974）は「高距限界」（標高 1000 m 以上、都市部より 50 km 以上離れる「居住限界」。即ち厳しい条件不利地域）という地理上の概念を用い、中央高地地域を中心に 88 の集落を調査し、当時存続する 59 の集落について、高度経済成長下存続が危惧されるとした。しかし、農業集落の全てが現在でも存続、半数以上が戸数増加し、高齢化率 50 % 以上の「限界化」が危惧される集落は 3 つに留まり、廃村化していた 29 集落においても 8 集落で再生の動きがあることが明らかになった（表 1）。
2. 88 の高距限界集落は、その主たる生業の形態により、より多様に分類することができる（表 2）。現存する集落は観光・休養・信仰・温泉集落が近代的観光地域として、また木地師・製炭集落が特産品生産地域として、時代の状況に応じ独自に対応して現存している。これは、集落固有の「村がら」（社会関係資本）を基礎として、特有の住民活動を展開してきた結果である。
3. いわゆる「限界集落論」は、年齢構成を主な指標とした集落類型に、時系列的意味を付与した一つの学説であり、未だ学問的検討の余地があるが、行政や現実生活の様々な局面で「与件」扱いされるおそれがある（表 3）。
4. 地域生活は、衣食住、生産・生業、交通・交易、社会生活、信仰、民俗知識、民俗芸能、娯楽・遊戯、人生、年中行事、口頭伝承、民俗技術を構成する「羅列的」で多種多様な要素を、自律的な「段取り」をもって実践することで営まれる。外部からもたらされる「論理」は（例えば「限界集落論」）、地域に危機感を提起するものの、具体的な対処方法にはなりにくい。地域振興活動への参与調査でも、失敗事例には「論理」の要素が強く、成功した事例には調査者による活動資源（生活資源・知識・技術）の「羅列」と、「羅列」に意味をもたせる「取り合わせ」により、地域住民自らが「羅列」された事物を「段取り」して実践されている（表 4）。地域振興活動への支援には、こうした地域住民の自律的「段取り」を促す「羅列」と「取り合わせ」が必要で、「論理」は特段必要とは言えない。

[成果の活用面・留意点]

1. 地域の振興活動に取り組んでいる研究者・農村生活者・行政担当者に、集落の健全な未来を志向する情報として提供できる。

[具体的データ]

表 1 『高距限界集落』の動向

1974年時点での廃村集落	総数 29	要因	ダム・移住 11	過疎化 8	開通・閉山 5	災害 3	不明（近世） 2	再生への動き 8
1974年時点での存続集落	総数 59	1970～2000年の推移						
農業集落	総数	センサス集落換算	限界化懸念	戸数減	戸数増			
	45	38	3	15	20			
		割合	8%	39%	53%			
農業以外	14	2008年時点存続確認						
		13						

※山口源吾著『高距限界集落』（1974：大明堂）に記載されている高距限界集落の追跡調査によるものである。

※廃村集落の「再生への動き」に関してはインターネット検索調査による

※農業集落の動向は2000年農業センサス集落カードにより追跡調査した。

※農業以外の集落の動向は現地踏査とインターネット検索調査とを併用した。

表2 高距限界集落の生業上からみた分類

生業分類	集落名
開拓集落	大平 大笹 熊倉 田代原 仙ノ入 中原 方伝 戸屋 柳平 六蔵 池の平 念場原開拓地 野辺山開拓地 中山開拓 南原山開拓地 霧ヶ峰農場
高距自給穀物農業集落	高坪 藤沢 関谷 日和田 小日和田 留之原
出作り集落	奥三川 番所 有峯
農業集落	黒森 金山 一ノ瀬 高橋 三川 牛首 加須良 大窪 馬狩 桂
林業集落	川端下 梓山 御所平 滝越 中島 本土 上笹又 下笹又 上秋生 下秋生 小沢 温見 熊河 巢原
木地師・製炭	飯糠 待沢 光沢 高原寺組 大花沢 入山地区 木次原 浦 北川 漆畑
観光・休養・信仰・温泉集落	中宮祠 湯元温泉 草津温泉 黒沢 蓼科温泉 強清水 平湯 増富ラジウム温泉
交通・宿場・峠集落	落合 袖崎 国界 三軒屋 大平 角ヶ平 西餅屋 旧軽井沢 峠町 板橋 峠 野麦 東餅屋
鉱山集落	元山 小串 吾妻 石津 白根 黒当屋

※山口源吾『高距限界集落』（1973）より

表 3 学説としての「限界集落論」とその問題点

（戦後）～ 1970年代	農民層分解論	農地改革・所得・労働市場の関連から均一な階層としての農民層が分解する。	根拠となる数値が難しい。そのため一つの学説に留まる。現実の農村も解体せず
1960年代～ 1980年代	ムラの解体論	農民層が分解することにより村が解体する。	
1970年代～	過疎化論 過疎・高齢化論	1966年経済審議会地域部会中間報告にて初出。都市「過密」との対称。1970年過疎地域対策緊急措置法（過疎が主題に）。	論理構成が単純で理解しやすいが、多様・複雑な村々を単純に整理し、その将来を「限界化・廃村」へと安易に帰結してしまう懸念。
1990年代～ 現在	限界集落論	過疎高齢化の換言。本来は年齢構成・戸数による集落類型に過ぎないが、時系列的意味を付与され、一種「与件」化。	

表 4 これまでの地域活動参与調査の内容・成果・特徴

	活動の内容	活動の成果	活動の特徴	
			調査者	住民
島根県〇市 （準限界集落）	十七夜大田植え（サンバイ信仰）、川遊びについての聞き取り	30年ぶりに河川の管理活動等々。耕作放棄地を解消。	羅列	段取り
島根県M町 （限界集落）	稲作生業・鉄穴流し生業（旧集落地の生活）についての聞き取り	生業儀礼の再生、他出子弟家族が帰郷。一部定住。	取り合わせ	段取り
岩手県I町 （含限界集落）	地域住民の聞き取りを記載した郷土誌を元にしたワークショップ	参加者間の情報交換が極めて盛ん。再度の実施を求められる。	羅列	取り合わせ
新潟県T市 （含限界集落）	①他地域回想法グループによる「お出かけ回想法」ソフトを用いたワークショップ	参加者より建設的・積極的発言無し。反発。	外部の論理	反発
新潟県T市 （含限界集落）	②生業・口承類の聞き取りの生データを、思いつくままに紹介。	過去の生活の情報多出。地域振興のため小正月行事等の再生。	羅列	取り合わせ
岩手県M町 （含限界集落）	高名な歴史学者の編集による郷土誌を元にしたワークショップ	現存住民にとり「意味のない勉強」という感想。	地域について外部者の論理	無視

※過去3年間における地域活動参与調査の結果を整理した。

※網掛け部分は失敗事例、それ以外は一応の成功を見た事例である。

[その他]

研究中課題名：農村地域の活力向上のための地域マネジメント手法の開発

実施課題名：多世代相互参画型社会関係資本構築に向けての伝承文化利活用システムの開発

実施課題 ID：413-a-00-003-00-I-09-7316

予算区分：交付金プロ（地域管理）

研究期間：2007～2009年度

研究担当者：山下裕作、関口正洋（アートフロント）

発表論文等：1) 山下(2008)『実践の民俗学』農山漁村文化協会

2) 山下(2009)現代民俗研究、1：89-99